

第5分科会

「【教育課題】 自立と社会性」

＜研究課題＞

自立を図り社会性を育てる教育の推進

視点：社会的自立を見据えた小学校と特別支援学校の連携から

<発表題>

社会的自立を見据えた連携 のための校長会の在り方

山形県上山市小学校長会
上山市立西郷第一小学校
校長 石原 敏行

地域について



人口 30,080人(令和元年10月31日現在)



小学校数 5校 (令和4年度からは4校の予定)



温泉町・城下町・宿場町



斎藤茂吉のふるさと 短歌学習



特別支援教育に係る本市の特徴

市内及び半径10km以内に5つの県立特別支援学校

- 県立ゆきわり養護学校(肢体不自由).....上山市
- 県立山形盲学校(視覚).....上山市
- 県立上山高等養護学校(知的).....上山市
- 県立村山特別支援学校(知的).....山形市南部
- 県立山形聾学校(聴覚).....山形市南部



伝統ある各校の交流学習

県立村山特別支援学校

県立山形聾学校



上山小

県立山形盲学校

県立ゆきわり養護学校

中川小

上山南小

県立上山高等養護学校

西郷一小

宮川小



① 上山小とゆきわり養護学校の交流

- 平成5年頃から交流スタート、今年で28年目
- ねらい(抜粋)
相手を理解し、相手の立場に立って行動しようとする態度を育てる。
- 実施学年(R1年度)
第4学年 児童64名 (8班編制)
- 交流学習は総合的な学習の時間として、年間15時間程度確保

① 上山小とゆきわり養護学校の交流

5～ ゆきわり養護学校の子どもたちの様子についての学習

- 6月
- ・ビデオレター、自己紹介カードの作成
 - ・ゆきわり養護学校の運動会を自由参観

7月 交流学習①(ゆきわり養護学校)

- ・8班に分かれての交流、自己紹介を通したふれあいなど

9～ 班毎に交流学習②での遊びの計画

10月 ゆきわり養護学校の教員をゲストティーチャーとして招き、アドバイス

12月 交流学習②(ゆきわり養護学校)

※ 年間5回、2校連絡会を実施 (計画と反省、振り返りなど)

② 中川小と山形盲学校の交流

- 昭和50年度から、「中川福祉村」にある学校として交流がスタート、今年度で46年目
- ねらい(抜粋)
互いに理解し合い、違いをふまえて一緒に行動する中で、思いやりや社会性、向上心、支え合って生きていくことの大切さを学び合う
- 各学年を単位としながらも、全校で(R1年度計96名)交流活動を実施

② 中川小と山形盲学校の交流

5月 交流対面式 ・全体交流、自己紹介ゲーム（中川小）

5～ 各学年交流、クラブ活動交流

11月 ・水泳授業への参加、創作活動(図画工作)への参加など

10月 山盲祭への参加 ・3～6年生（盲学校）

11月 交流学芸会（中川小）

2月 豆まき、雪遊び、学習発表会など

※ 年度初めと年度末に、2校連絡会を実施

・年間計画作成 ・年間反省 など

③ その他にも

○ 5月 陸上記録会

- ・ 山形盲学校の児童も選手として参加



○ 6～7月 小中学校鑑賞教室(音楽・演劇)

- ・ ゆきわり養護学校、山形盲学校、上山高等養護学校と一緒に鑑賞

③ その他にも

○ 7月 水泳記録会

- ・山形盲学校の児童も選手として参加



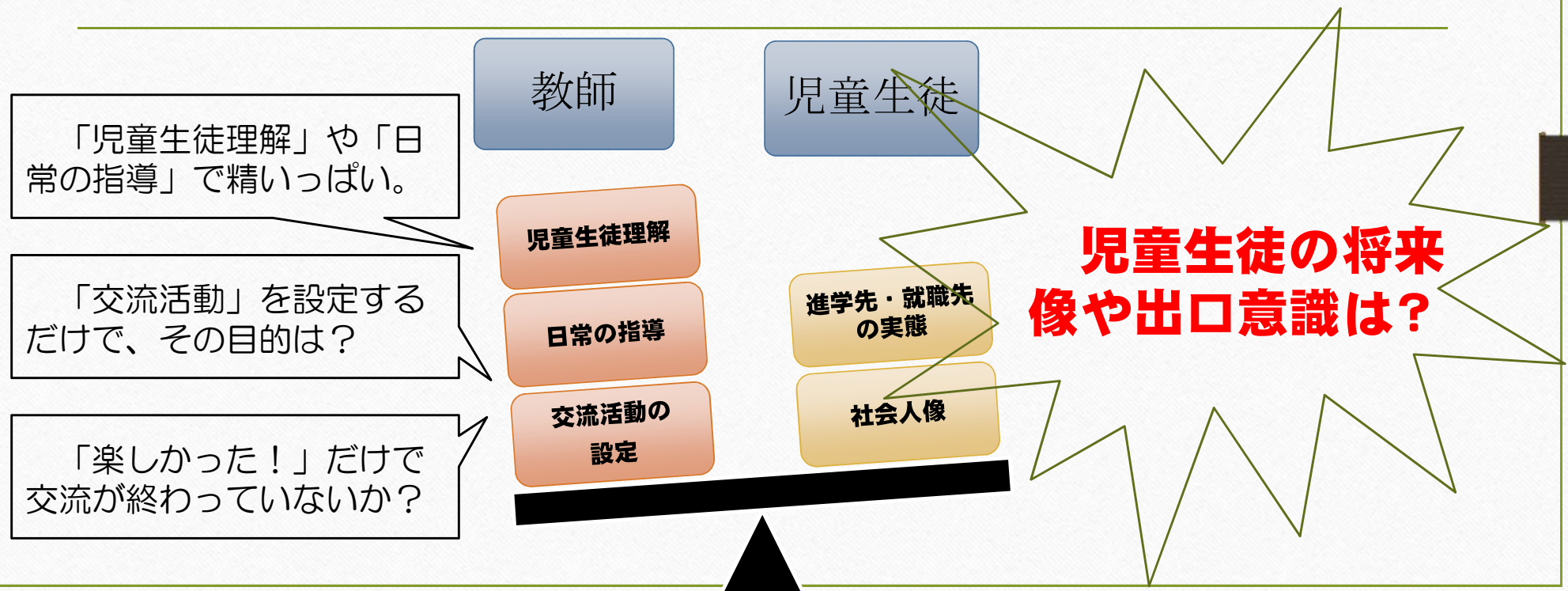
○ 11月 かみのやま教育の日

作品展示 音楽発表会 短歌発表会

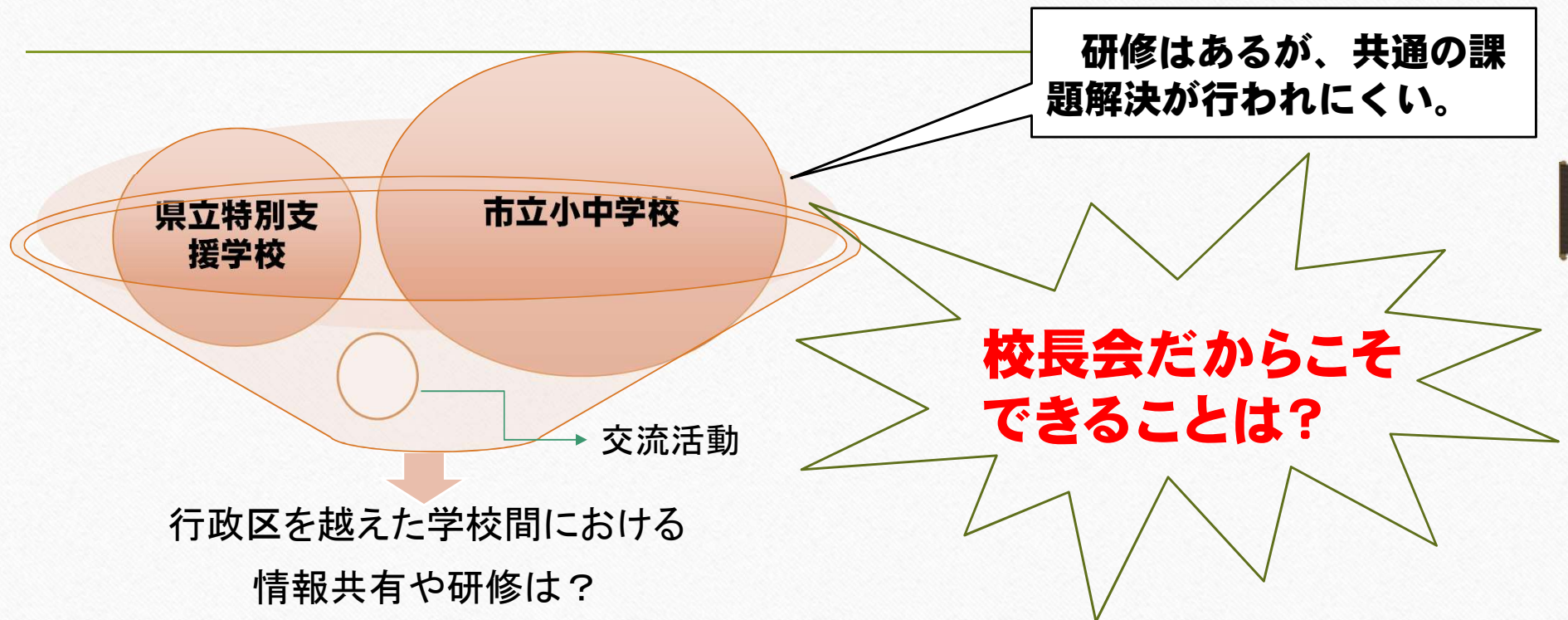
- ・山形盲学校、上山高等養護学校の児童生徒の参加
短歌発表や作品展示 など



<課題1> 支援を要する児童生徒に対して



<課題2> 行政区の違いから



研究の概要

- 義務及び高等諸学校卒業後の実態の把握
- 自立した社会人として求める児童生徒像の共通理解
- 上記を意識した交流活動とその効果



交流が目的ではなく、自立した社会人像の共通理解と具現化

研究の全体フロー

1

長期プロモーションのフロー

STEP 1 平成30年度

実態の把握と分析
聞き取りによる実態調査

STEP 2 令和元年度

情報発信と修正
アンケートの実施及び情報発信

STEP 3 令和2年度前期

県大会での発表と修正

STEP 4 令和2年度後期

東北大会での発表

研究の整理と還元

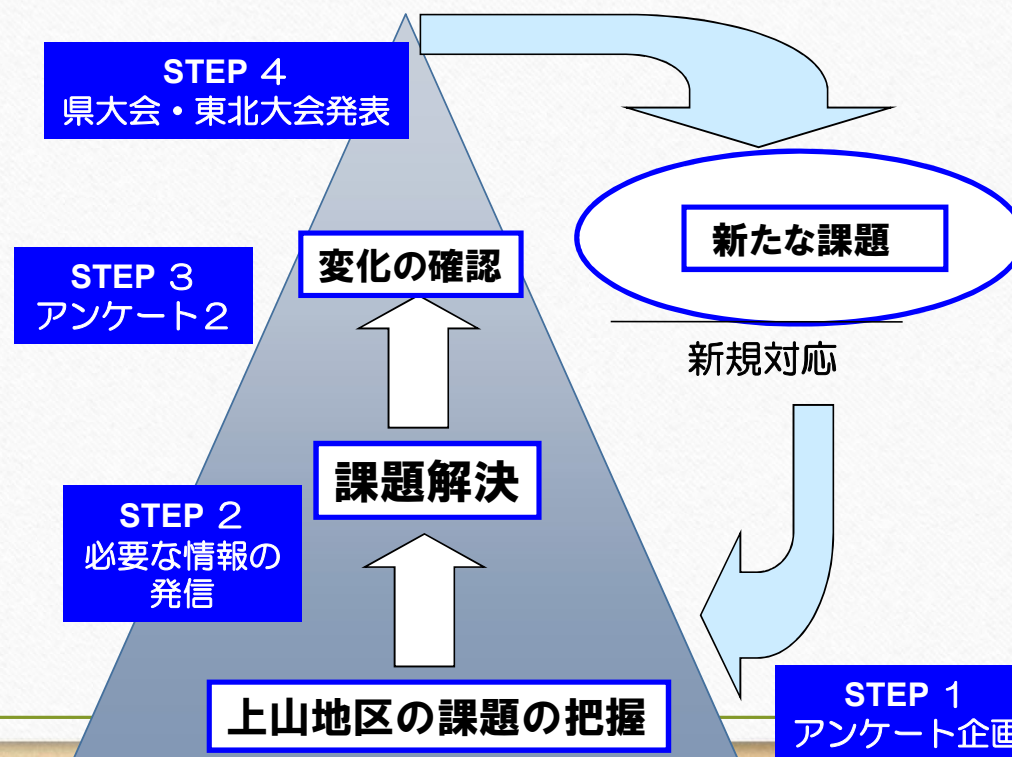
テーマ：自立と社会性

視点：社会的自立を見据えた小学校と特別支援学校の連携

理由：①特別支援学校が多い

②特別支援学級における活動の充実

③社会参加の出口が見えない



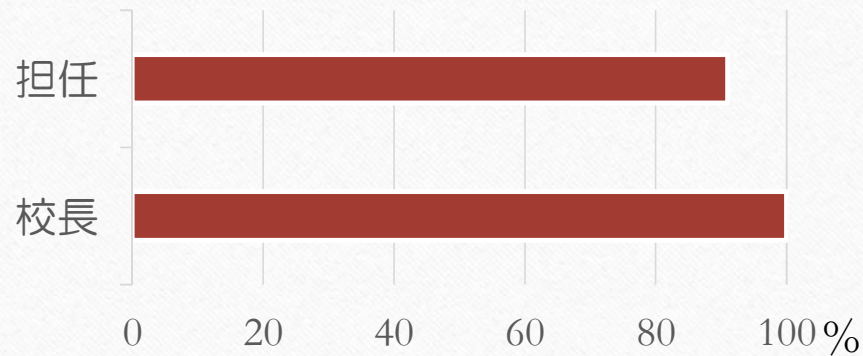
アンケートによる実態調査から

- 対 象：上山市小学校 校長
及び 特別支援学級担任
- 内 容：特別支援教育にかかる意識等
- 実施時期：令和 元年 9月

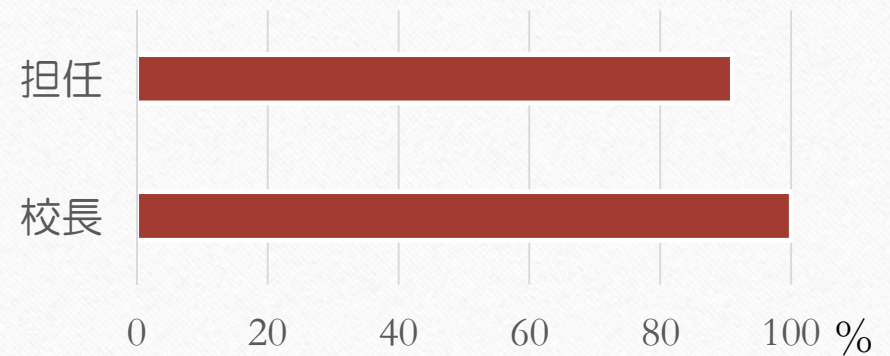
アンケートによる実態調査から

子どもたちが自立するために必要な支援は何か？

①生活力（日常生活を営む力）
を身につける



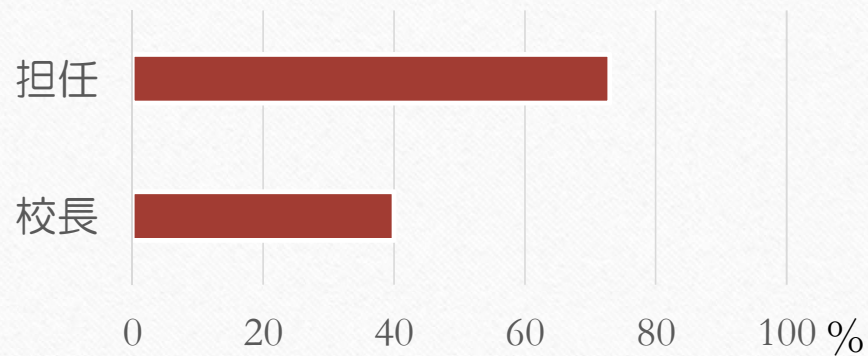
②社会性（人間関係を構築する力）
を身につける



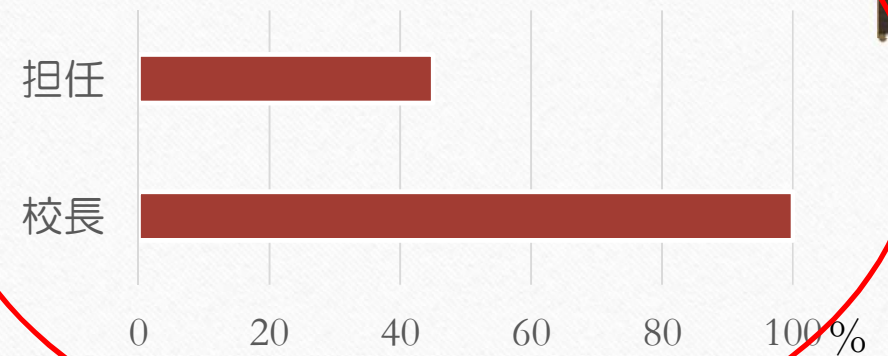
アンケートによる実態調査から

子どもたちが自立するために必要な支援は何か？

③共感性や優しさ、感謝の心などの
人間性を育てる



④進路や職業に関する情報提供を行い
保護者の進路意識を醸成する



アンケートによる実態調査から

「自立のために必要な支援」について

担任：「生活力・社会性・人間性の育成」



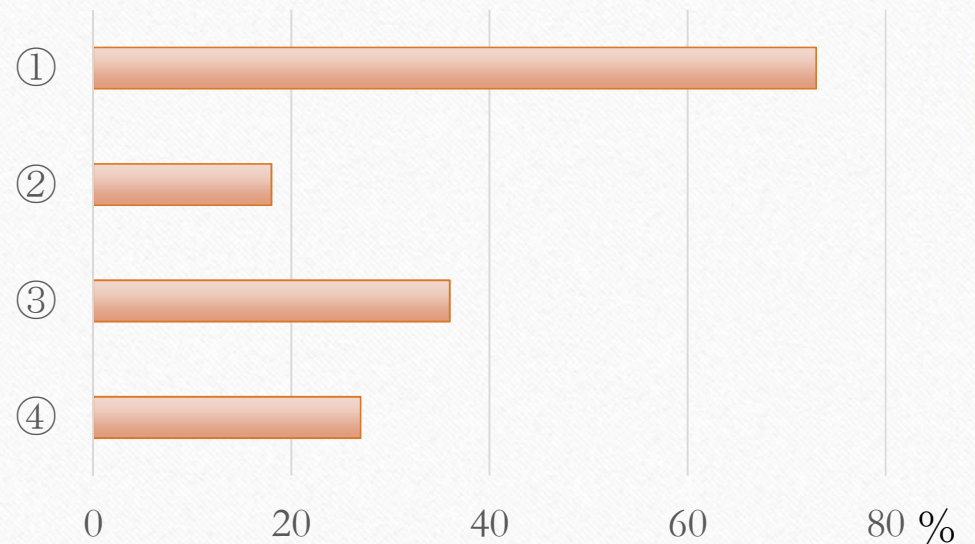
校長：「生活力・社会性・進路意識の醸成」

アンケートによる実態調査から

進路指導に関わる状況

＜特別支援学級担任対象＞

- ① 児童が将来、自立(社会参加)できるような指導を行っている
- ② 自立や社会参加の育む上で、**児童の将来の職業に関する希望を把握**している
- ③ 自立や社会参加に向けて、**保護者に将来の進路選択の道筋を説明**することができる
- ④ 進路指導を進める上で、児童の支援に必要な**専門機関との連携**は十分に行っている



(当てはまる・やや当てはまると答えた割合)

アンケートによる実態調査から

特別支援学級担任として

将来的な社会参加に関する進路指導の情報
や知見が担任に不足していることが背景

◎自立のための指導（生活力・社会性・人間性の育成）

▲職業観の育成や進路選択等の進路指導
及び 外部機関との連携を意識した指導

アンケートによる実態調査から

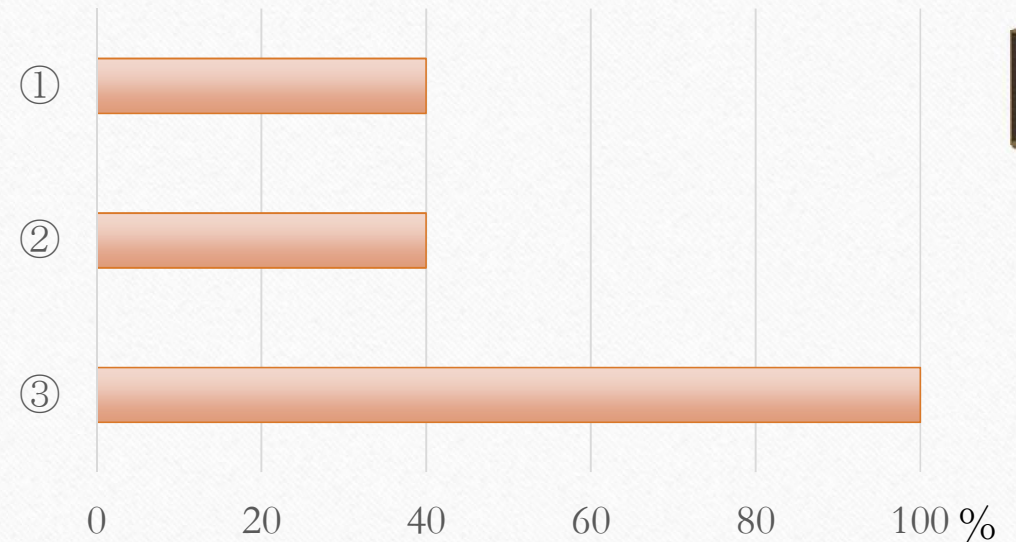
外部機関との連携・特別支援教育の推進

＜校長対象＞

① 児童の支援のために必要な専門機関との連携を行っている

② 特別支援教育に関する情報を保護者や地域に発信している

③ 特別支援教育には校長のリーダーシップが最も重要である



アンケートによる実態調査から

校長として

特別支援教育の推進に向けて、校長のリーダーシップが必要であることは自覚しているものの、外部機関との連携や保護者・地域への啓発が進んでいない。

特別支援学校からの聞き取り

- 対象： 上山市内及び近隣の県立特別支援学校5校
 - 県立山形盲学校 • 県立山形聾学校 • 県立ゆきわり養護学校
 - 県立上山高等養護学校 • 県立村山特別支援学校
- 時期： 平成30年1月～令和元年11月
- 内容：
 - （1）進路状況について
 - （2）子どもたちの自立に向けて大切にしていること
 - （3）小学校等との交流について

1 進路について（高等部卒業後）

- (1) 進学
- (2) 一般就労
- (3) 福祉就労
 - ・「就労継続支援事業所（A型）」
 - ・「就労継続支援事業所（B型）」
 - ・「就労移行支援事業所」
- (4) 生活介護事業所
- (5) 療養介護（病院等）

障害者雇用の注目により、受け入れ可能な実習先が増加



就職先が増加
傾向

2 子どもたちの自立に向けて大切にしていること

- 基本的な生活習慣

例 トイレの後はしっかりと手を洗う、身だしなみ、マナー

- あいさつやコミュニケーション

例 体が動かなかったら、まばたきしたり・・・

- 人として大切にしなければならない行動や気持ち

例 粘り強さ（あきらめずに取り組む） 挑戦する気持ち
責任感（自分の役割をしっかりと果たすこと） 思いやり

など

技術は就職してからでも身に付けることができる。当たり前のことばかりできることの方が大切。

当たり前のことを当たり前に行えること



特別支援学校・学級以外でも大切にすべきこと

特別支援学校に限ったことではなく、小学校でも大切にすべきこと。連携・交流していく上で、特に意識していきたいものです。

3 小学校等との交流について

- 特別支援学校に在籍する児童生徒にとって
「社会性を広げる」 「地域による認知」
- 小中学校にとって
 - ・ 「共生社会をつくる」ということの発信
 - ・ 一人でできることは一人でさせる
- ▲ 交流が形骸化しないようにすること
教育課程上のどこに交流を位置づけるか
ねらいの明確化 「これまでやってきたから今年も・・・」

自立した社会人像の 共通理解と具現化に向けて

「上山市特別支援学級担任会」における活動

＜令和2年度の活動から＞

- 野外学習会（7月）
- 芋煮会（9月）
- 交流学習会（2月）

それぞれの子どもが、将来どのような自立をしていくのか、イメージしながら

自立に向けて大切にすべきことを意識して活動を展開

まとめ

- 社会で自立できるようにしていくためには、
大人（親、教員も）が将来を見通して支援していくことが大切である。

まとめ

- 将来の見通しを持つ（進路の選択肢を見通す）ためには、特別支援学校から情報発信することも大切だが、小学校側から特別支援学校等と積極的に連携し、情報収集することも必要である。

まとめ

- 小学校段階から、将来の自立した姿をイメージし、どのような学びが必要なのか、どのような力を身につけなければならないのか、当該の子どもと関わっている大人が共通理解をはかり、教育（支援）にあたることが大切である。

今後に向けて

教職員(意識)
の変化

活動の変化

子どもの変容

把握と検証

成果と課題

○特別支援学校における進路状況をもとに、特別支援学級に在籍する児童の進路について、見通しを持つきっかけとなった。

○特別支援学校との交流のねらいを再確認することで、連携の在り方を改めて見直すことができた。

●児童一人ひとりの進路を考えるにあたり、中学校との連携も大切になるため、今後一層小中連携を充実していく必要がある。

●特別支援教育に関する情報をこれまで以上に保護者や地域に発信していく必要がある。

提 言

- 行政区を越えた連携を図るためには、任意団体である校長会が積極的にリーダーシップをとることが大切である。



各種団体の精選と価値付け

- 既存の交流活動や連携において、教職員の目的意識を明確にすることで、より大きな効果が期待できる。



意識の変換による「働き方改革」

ご視聴ありがとうございました。

